

令和6年10月17日木曜日

13:00～14:00

山科事務所にて

定期巡回のクローバー

令和6年度第二回 定期巡回・随時対応型訪問介護看護サービス

介護・医療連携推進会議録

出席者：末國氏・長谷川氏（欠席）・吉澤氏（萩原氏代理）・鶴飼氏・山口氏（小松氏代理）・岩原氏・星野（クローバー代表）、立脇（クローバー管理者）、嶋田（クローバー事務長）（書記）

（1）クローバー挨拶、構成員紹介（別紙：構成員名簿あり）

代表星野より挨拶

京都市の要支援、要介護認定者1万人増加している。全国に比べて一号被保険者の中での要支援・介護認定者率も全国では19%だが、京都市は25%となっている。山科区は24.5%と幾分お元気な方が多いのでしょうか。それに比べ伏見区は要支援・介護認定者数については京都市内で山科区は東山区を抜いて一番になっており24%のところ醍醐地区は27.5%で京都市内の地区単位で第二位となっている。

山科区は地域包括支援センター5か所、醍醐は2か所でありいづれも多く認定者を抱えておられる事が想定でき、めまぐるしく活動されているのではないかと推察するとともに、少ない人材で本当に支援が必要な方のニーズを拾いきっていく事の課題感を感じている。

居宅の人材不足も顕著で「ケアマネ難民」という問題もあるようで担当が見つかるまでに1ヵ月2か月かかることもあるようである。若い世代のケアマネ希望者も少なくなっているようで、介護保険創世期に資格取得されたベテランケアマネジャーが定年などでリタイアされてきた現実もあり、ケアマネジャーの更新制の撤廃など制度面も工夫を検討されているが、こういった実情の中で一つ一つの事業所がどうやって必要な支援を山科区の皆様に届けていくか、ということを考えていかねばならないと考えている。

（2）R6年4月からR6年9月までの事業所の動き、周知活動等について

○醍醐事業所〔山科サテライト含む〕について

・ご利用者の推移：R6年9月末 ご利用者数 34名 平均要介護度 3.45

(内入院等 4 名)

R6 年 3 月末

35 名（うち入院 2 名） 3.1

例年通り、利用者数は増減を繰り返しながら経過している。

現状として醍醐のご利用者数と山科のご利用者数は逆転傾向に有り、山科のご利用者が増え、醍醐は減少している。地域的にも山科の方が広く、包括支援センターの数も多い。今までは醍醐事務所に職員が在駐していることが多く山科は居宅の CM が在駐している状態であったが 10 月からは常勤職員が少しずつ山科で過ごす機会を設けていく。

(4) 周知活動

毎月醍醐と山科を各 1 日ずつ居宅や病院の地域連携室、包括、訪看などを訪問し周知活動を行った。

- ・医療連携室を訪問し周知活動を行った。
- ・山科において包括支援センターへ訪問し、周知活動を行った。
- ・定期巡回のご理解を深めて頂けるよう資料をまとめ、ファイル化して各事業所に置かせて頂いた。

○より効率的な情報共有のために・・・電話偏重の方法から舵を切り、社外事業者とのチャットワーク、LINEWORKS の実用開始をしている。実際支援チームでグループを作り情報共有するなど高い効果を得ている。

電話は必ずしも担当者と繋がるわけでもなく、非効率な連絡手段とも考えられるため、このような手段を積極的に取り入れていきたいと思っている。

鶴飼氏：医師は日常生活も知りたいと思っており、MCS の活用も併せて考えていければ良いかも。医療従事者が介入していないご利用者もいる上、いろんなツールがあるのも混乱に繋がるので今後の検討材料。

吉澤氏：若手を中心に運用を考えている最中。

山口氏：ヘルパーステーションから運用のご希望はあるが、まだ運用していない。

その他地域の活動

TUMUGI プロジェクト(裂き織り活動；別紙有り)

・地域密着サービスの使命として地域住民等との連携をとっていけるように。また、クローバーがここに有り、地域の皆さんと一緒に地域で活動していくと知っていたくように活動を広げている。地域の方々が気軽に介護のことなど何でも相談できるように。

また、毎回話題にあげているが、地域で困っている方等の発見に繋がれば。

・北部包括の西村所長のご紹介により地域コーディネーターの斉藤氏、たのしい家醍醐の木村氏とミーティングを行い、たのしい家のご利用者と裂き織りの手芸を行った。

・10月26日土曜日 和光祭参加(チラシ参照)

ワークショップ開催。

●「学生支援」×「地域交流拠点」＝「地域活性化&文化・芸術振興」における活性化の取り組み

5月16日に西野山団地で行われた催しにサービス協会の河本氏のお招きで参加した。

ワークショップの取り組みなどの説明を受けた。

ワークショップスペース・喫茶スペース・裂き織や現在取り組まれている内容について説明を受けた。今後のTUMUGIプロジェクトに「どのように絡めていくか？裂き織作品を展示したりワークショップで近隣の方々と一緒に裂き織作業を行いながら学生の方々と交流をするイメージを膨らませた。

吉澤氏：西野山のコミュニティ作りの会合に参加しているので、必要であればご紹介させて頂くので、お声掛け頂きたい。

○地域活動における地域で求められていることはどういったことがあるでしょう？

・前回4月以降、どんな困ってらっしゃるケースがありますか？

・地域参加において出来る限り色々な場面で参加していき、地域に溶け込み地域の事業所として根付いていければと考えているが、何か行事予定などありますか？

末國氏：また後ほど。

(5)前回の質問：定巡メリット・デメリットは？(別紙参照)

前回の醍醐での連携推進会議に於いて質問があった。

醍醐の連携推進会議に於いて定巡のメリットだけでなくデメリットも知りたい。メリットだけではご利用者に説明をし、実際にサービスが入った後「話が違う」となりかねないという話があった。今回定期巡回のデメリット・メリットを改めて伝える為、別紙を作成した。

デメリット・メリットですがメリットが沢山になりすぎてしまいました。在宅生活においてメリットが沢山あるからこそ、定期巡回を広めていきたい、もっと知って欲しい、自宅で最後までと望むご利用者の気持ちにより添っていきたい、前職での悔しさを前向きに捉え、現在があります。

●鵜飼氏・・・CMから定巡を使うと訪問看護が週1回などになり困るという意見が度々聞かれる。訪問看護として週2回3回の訪問が必要な状態はどのような状態であると考えられるのか？ヘルパーに活動を指示することで週1回での活動でまかなえるものではないの

か？意見ををお願いします。

➡生活重視の方は看護はバックサポートで良い。医療のニーズが高ければ医療に切り替えるとかすれば良いので、ケアマネジャーや看護師がしっかりとアセスメントすれば良いと思っている。観察すべきポイントなどをヘルパーさんに伝えて、何かあれば走れる準備だけしておけば、ヘルパーさんにお任せするので十分でないか、と考えている。

なぜ、その方にとって週二回の摘便が本当に必要なのか、ということをアセスメントを踏まえ、家族にも説明が出来ていないから家族も納得されないのではないか。

病院が退院直後は「このようにしなければならない」という固定観念があるので、退院後2週間の特別指示の間にアセスメントをしっかり行って正しい説明をする事が大事だが、それでも納得されない方については無理にサービスを勧めるものでもないので別のサービスをご利用頂ければ良いと考えている。

(6)居宅支援事業所として定巡を使い辛い言うところは以前から単位数や訪看の訪問回数、DSやSSの利用回数が限られる等有ると思うが、定巡を使いながらもどういったことが出来ると「在宅生活を続けたい」と願う方の思いを叶えることが出来ると思われませんか？例えば定巡を利用し出来る事、(工夫があれば)出来そうなことなどしっかりアセスメント出来、事業所間で共有し支援出来れば等。

山口氏：南区でしばらく勤めていたので、その時は定期巡回の利用もしていた。週2回以上の入浴をしたいと希望される方がいたが、どうしても排泄介助の課題があり、通常訪問介護だと複数事業所を利用しないとどうしてもならないこともあって定期巡回を利用していった事があった。こちらに移ってきて夏場の水分補給対応などで定期巡回を活用した方が良かったと思う事もあったが、訪問看護がかなりしっかり入っているケースでなかなかそこに食い込んでサービス転換する事は難しいと感じた。

岩原氏：訪問看護が入っていると、それで安心。という風潮が社会的にも、ケアマネにもあると感じている。ヘルパーが専門性を高めて訪問看護に代わる価値の提供を打ち出していく事も大事かとも考える。単位数が高いことについては制度が変わらないとどうしようもないことだが、外にたくさん出たいという方に対しては使いにくいと感じるのは事実だが、そうでない方々については定期巡回を使う事が安定した在宅生活に寄与することは間違いないので引き続き広報活動が重要か。

(7)「判断」をお願いする連絡から「提案」をお伝えする報告へ

開設5周年を迎えクローバーは生まれ変わります。

定期巡回は一日に複数回や毎日訪問することにより、今まで滞在型のヘルパーが週に2, 3回しか訪問していなかった状態からは考えられないほどご利用者の情報があふれてくる。その中で毎日の判断が必要になる場面が増える。その事から今までCMの方々には「毎日連絡来る」と手間を掛けてしまったことが多かったと5年を振り返り、立ち止まり

自分たちの活動について考える機会がありました。

今後は社会資源をたくさん知る事や報連相のスキルを上げる事等も行っていき「判断」をお願いするような連絡から「提案」をお伝えする報告へ！クローバーは生まれ変わります。

「在宅生活の限界を引き上げる」これを目標にこれまでに在宅介護の業界が経験したことがない情報量と展開速度を実現し、皆様にご理解いただいて有効に使っていただけるよう挑戦を続けていきます。

山口氏：ケアマネが決めないといけないとは考えていないし、たくさん報告があるということは状態が変わってきているということだと思うので、しっかりと集まって検討しなければならないと思うので、報告がうっとうしいとは思わないが、月末などは大変だな、と感じるかもしれない。

末國氏：勸修ふれあいのつどいが大盛況のもと終了した。運営側の高齢化も進んでおり、橘大学と連携して実施した。このように交流をしながら実施していきたい。

運動会も実施しているが、参加者が減ってきており半日開催となっている。

65歳以上の方を対象に布団の丸洗い事業を実施している。羽毛布団は中に入っている材料によって洗っている最中に中で千切れてしまっただけで弁償トラブルになったりという事案もあった。これから羽毛布団が増えてくる時期になってくるが、出来れば中国産は避けるようにした方が良さそうだ。

継続して振り込み詐欺も多い、と警察からも注意喚起あり。

次回 R7 年度第 1 回 介護・医療連携推進会議 ：令和 7 年 4 月に予定して

おります。ご協力をお願いいたします。

以上